少かけて持べし、年をふるほど、根ゑまりてよし、さて冬は土藏に入、時々朝日のさす所へ出したるよし、又朝日のさす所に、上と脇を寒氣のあたらぬ樣にかこいて、置たるもよし雪霜少もあたれば、葉先かるゝ、二月の時分より取出て、葉をすかし指南をすべし、からせきせうは、鉢に植る砂土にかべ土をまぜ鉢にならし、せきせうの葉を、根本を切テすて、鉢の中よりあつく植る、廿日ほどして葉しげりて見事なり、冬は雪霜にあたらぬ樣にすべし、まきせうは、岩松をあつめつがねて、針金にてまき、さてせき玄やうの根をあらい、わらび繩又はしゆろなわの、成ほどほそきにて、右の岩松へまき付る、尤葉は切てすてたるがまきよし、やがて葉出る物なり、節々箸にてなづべし、岩松にまきたるは、よく水をあげ、久敷さかへてよし、外の物にまきたるはくさりてわるし、近年の仕出しに、ちいさきほうろくに、田土合肥をねりまぜ、平にしてせきせうの根の長きをあらい、葉をむしりすて、右のほうろくのねり土へならべ、所々へ竹の串をさして、根のうごかぬやうにして置、五ヶ月にしてほうろくをやぶりすつるに、よく根からみて有る葉をすかし、手入して用る、俗に龜子せきせうといふ、その形中高くして龜子似たればなり、ほうろくは其性土にして水をふくむゆへ、せきせうをして早くからましむる、又こけらせき玄やうといふ有り、是はせきせうの根も葉もよくあらい、油綿を以てなづれば、葉色うるはしくなるを、竹のくぎをけづり、せきせうをあつめ、根と根へかの釘をうちてかため、夕に拵朝に賣る、初心人は是をしらず、かの油にてなでたる葉、色の見事成にまかせて調るに、根は釘付成ゆへ、明日をまたずしてかるゝ、吟味有べし、

又澤せきせうと云は、在郷の澤よりほりて來るを、其まゝあらい、油わたにてなで鉢に入る、是も後はわるし、右の外にもつくり樣侍れ共、大方此分よし、

〔草木育種下品〕菖蒲本草　種類數十品あり、漢土西湖の邊に生ずるもの舶來る、其形狀本邦の石菖